

第十七回純黄賞

作品 菊山正史

右に贈ることを決定した

令和二年七月

コスモス短歌会

第十七回純黄賞の選考経過

五十歳以上の会員で入会後五年以内の新人を対象とし、今年恒例により、二〇一九年の一月号から十二月号まで一年間のコスモス掲載作品から選考された。

まず選者団より1位から3位までの推薦を求め、高野、影山、桑

原、狩野、宮里、小島、木畑、大松、田宮、津金、小山、福士、藤野、風間、田中、橘、水上比、鈴木、原賀、水上美、大野、松尾の各氏より回答があり、被推薦者は9名であった。菊山正史37点、水辺あお26点、北祐二郎25点、浅田みどり25点、寺田静6点、工藤亜希子6点、前中映4点、磯部剛2点、橋本照美1点となり、五月十六日編集会で検討して、菊山正史氏への授賞を決定した。

感想

菊山正史



十代には人並みに牧水や啄木の歌を口ずさみましたが、その後歌とは無縁でした。

新採用者への寄書きを三十一文字で作りましたところ、歌の韻律が甦ってきました。

さっそく、広島支部の宮本君子様が講師をされている短歌講座に入会し、歌作の手ほどきを受けました。

半世紀ぶりに歌に再会して、歌作を楽しんでおりましたところ、受賞のお声がかかり、恐縮しつつも大変喜んでおります。

ありがとうございます。また、宮本様や

励ましを頂いた広島支部の皆様にも感謝申し上げます。

これからも命の続く限り、暮らしの哀歓を、平明な表現で詠っていききたいと思っております。

略歴

一九四八年 広島県生まれ
二〇一六年 コスモス短歌会入会
二〇二〇年 随筆賞受賞

第十七回 純黄賞選考資料抜粋

菊山正史推薦

○喩えを活用した主観表現が巧みである。妻や子を歌い思いが籠る。表現が安定している。退職後に己を振り返って詠む現職時代の歌に味がある。

○退職という節目に立ったときの感情が細やかに表現され、家族に向ける視線も自然である。過剰にならず破たんのない堅実な作品を生む作者である。

○退職し、故郷の過疎の村で生活する日々を丁寧^{テイネイ}に掬い取っている。認知症を患う母の歌や、「古稀の青春」と詠むなど、印象に残った。

○退職を機に故郷に帰り、農にイそしもうとするがまだまだ馴染めない日常を、ていねいに歌っている。

○退職後、故郷の山村に戻り、老母を見ながら畑作をして暮ら

す。その生活感が重厚に詠まれている。一首一首に生の確かな手触りがあり、調べが力強い。

○確かな手触りのある生活者の歌。昨年も候補に挙がっているが、地味ながらその世界と表現に揺らぎがなく、実力者である。

○不本意に職を離れ農として生きる男が詠む故里の情景が、美しくもやるせない。

○退職後、高齢化、過疎化の著しい故郷に戻り、その厳しい生活の実態を適確に詠んでいる。また、そこに根を下ろして生きる覚悟も力強く詠んでいる。

○退職後、帰農して母を介護しながら生活する日常を丁寧に見つめて詠む。真摯で温かな人柄が伝わった。

○静かでしつかりとした詠い口が魅力。退職後の日常を丁寧に描写している。家族詠は、家族への愛情が感じられて良い。

第十七回純黄賞の選考のもととなった推薦文と作品の一部を、ここに掲載する。推薦文は〇印が一人分、推薦作品抄は、推薦者の挙げた作品の中から編集部が適宜抄出したが、推薦の多い作品を前のほうに掲載してある。

推薦作品抄

菊山 正史* (第十七回純黄賞)

退職で最後に仰ぐ執務室ツツムシムシいつものようにファックスが鳴る
若き日に叶わなかった750CCを皮ジャンで走る古稀の青春
ヒューヒューとひよどりヒヨドリが鳴く暮れ方はホームの母の息を思えり
今朝けさできた一首を夕べ読み返す窓辺に映るぶどうは青く
植樹して清流保つ江ノ川カネガハわれら待ちおり若鮎ワカサギの群れ
罪のなき真白マコトきノートめくること布団をめくる今朝の目覚めは
今朝釣つりりキスに薄塩うすしお手振りして妻と二人の静かな夕餉
家人なく一日を黙す病み床に栗の雄花が窓辺をたたく
麦秋を傾斜しんげ厳しき畑はたけに刈るわがふるさとに妻と帰りに
組織という列車の後尾おしりにぶら下がり旅したようなわれの半生
帰り住む過疎の区長を拝受する残照なれど力尽くさん
朝明けの薄紫のレンゲ草すき込む畠に力湧たぎりくる
認知症の母が棄てたる化粧瓶のかけらを拾う隣家の畑
認知症の母はわれ打つ蕎麦を食ふふと笑う秋の陽ざしに
段畑の日に灼かやれつつ蕎麦の種を傾斜地に播く母に倣まねいて
トラクターのバックミラーに老い鹿の草生を独り渡るが見える
弟に新米送る荷造りの納屋に神楽の囃子が聞こゆ

○ホームに暮らす母や七十歳を過ぎてから始めたふるさとでの農業など、めぐりを丁寧に掲げ取り、生き生きとした暮らしぶりが伝わる。

水辺あお推薦

○「その二」所属であるが、年間特選回数十一回というのは異例である。素材の幅が広く、豊かな語彙で対象の本質に迫る。好奇心に満ちた作品は読む者の心を明るくしてくれる。

○この年度に退職。シリアスな素材から日常の些事まで歌材の幅が広く、それをうまくまとめる力量をもつ。口語の入れ方が巧みで、軽妙な味わいもある。

○自己、他者、動植物、天地、物世の中、時間、何を詠んでも水辺あおの歌となっている。言葉の出力、歌の鮮度が高いのだ。

○滑稽味をしのばせた達者な詠みぶりは、読者を楽しませてくれる。

○時事詠、叙景歌、夫婦の信頼感が伝わる妻を詠む作品に漂うユーモア、何を詠んでも独自の視点がり、年間11回の特選も納得である。

北祐二郎推薦

○旧かな表記に、格調高い調べが相俟って、LINEなど現代社会を詠んでも、独特の歌の世界を作り出している。

○身の回りのちいさな出来事を、明確に表現することによって詩に昇華させ、作品として提示する。読み手に気づきをうながす作品が多い。

○数年来、本賞受賞候補者として名前が挙がっている。繊細な抒情質溢れる作品が特徴。今年家族を詠んだ作品にも見所が多かった。

○ロマンチストの心とシニールさを合わせ持つ。現実をリアルに表現する力技がある。上の句から下の句への転換が魅力。叙景にも力を発揮している。

○初期の理髪店の歌も良かったが、最近はその歌も良作が印象的。ゆたかな美しい歌を開拓しようとして模索している。

浅田みどり推薦

○日常の些細なことにも目を配り素材を掬い上げる。細部に詩が宿ることを承知している。歌の対象に心をよせ、目では見え

水辺 あお

人間の声聞き動く機器生まれ人の話を聞かぬ人増ゆ川は急く大海となり雲となり雨となるのが楽しくて急ぐ壙の蓋かるがる開けてああけふは妻に勝つたと思ふ午後なり新聞はその日に読まぬほうがよし腹立たしさが少しやはらぐ水の辺で日々太りゆく菓の蜂らこの一村を領空とせり男根と女陰の神がたはむれて浜の祭りは陽射しを強む屋根のある家に暮らせば春雨は家の周りを包みて降れり一億の八%がカニ座だと知りつつも読む明日の運勢なによりも林檎が好きなたとて林檎の香る家に暮らせりクリポッチ、ワンちゃんデート、学生が教へてくれし二語得て辞めぬ

北 祐二郎

展望のデッキにたたずむ風の午後子のひかうきは今飛び立てり春の夜の渡月橋より子のLINEそびらの空に満月写るはつなつの泉の底に濃く揺らぎてあたりわが影法師贈る言葉残されしままの黒板に春の光の白く差しこむ潮の香の路地を曲がれば思ひ出す幼き頃の駄菓子屋の道ページ繰る風の指先ばらばらと君の歌集のひかりの歌よ獅子柚子の肌に深き影ありてツツツと溝をつたふ雨つぶつぶやきも時に必要なのだらう薔薇がぼろりと零す雨つぶ

浅田みどり*

光なき地底湖に棲む白き魚眼を捨て総身触覚器とす煙の味いぶりがここに閉じ込めてけむりまで食ぶ秋田の宿に草取りも介護も(道)をつけたれば楽しくなりぬ介護道極めん空の青月の黄いろを身に映しソラスズメダイ浜名湖に棲む春風に遊び遊ばれふくらめる前ゆくひとの黄のワンピースやさしげなバリアフリーという暮らし身は慣らされて日々退化せり仲秋の月を仰ぎて今宵詠む歌はおおかた過去形の歌

ない内部を作品化する。

○描写に優れた作者である。物事を正面から描くだけでなく、物の影や裏をも注視して、的確な表現で読み手にその情景を届けることができる。

○身辺雑事から遠い世界のことまで軽妙な歌い口で巧みにとらえ、歌を詠みまた読む楽しさを教えてくれる。

○見落としがちなものにスポットを当て、明るくユーモアをもって詠む。

○意欲的にかつ楽しく歌を作っていることが伝わる。さりげない日常を詩的な歌に昇華させる技は巧みだ。

寺田静推薦

○研ぎ澄まされた感覚で、都市生活の歪みや違和感を歌にする。独特の表現が魅力的だ。

○激しい表現では無く静かに詠まれた社会詠に深さを感じた。

○本誌、今年一月号誌上で発表の「O先生賞」受賞者。実力は折り紙つき。詳細な職務内容は不明だが、それに纏わる哀感が詩的に昇華されている。

工藤亜希子推薦

○詩的でユニークな発想を武器に、歌の美しさに心を配っている作者のありようが、読者にもよく伝わってくる。

○時代にも人の姿にも敏感だが浅田真央や、マリア・カラスを詠う時も、俯瞰の目が働いている。精神的で、不動のまなざしを持つ人だ。

前中映推薦

○多く弱者側への目が働いているが、「安息角」など専門用語を使う力量も備えている。表現力の高さを表立てない歌柄で、みずみずしい感性の持主。

磯部剛推薦

○地元新潟の風土に根ざした歌が味わい深い。大胆で独自の発想や表現、また韻律のよさなど才を感じさせる。

橋本照美推薦

○現職の看護師として働く日々の哀歓を丁寧に詠んでいる。そして、厳しい現場からのメッセージともなりえていて、魅力的な作品が多い。

葡萄棚をもれくる淡き光蓄めシヤインマスカットは発光体となる

寺田 静*

花束は一華一華の花のむれ群れを離れるおとこに渡す
オキナワと面積のほぼ同じなるカナガワの夜 米兵眠る
いまきみがマイクについた些細なる嘘ほわほわと春の電磁波
謝罪して謝罪をされて老いてゆくかつて少年だった者たち
船を漕ぐ宇宙を泳ぐ満員の電車に浮かぶ脳髓あまた
嘘つもる土の高だけ嘘つもる汚れていないはずの汚染土

工藤亜希子*

平成という林檎に蜜の時間あり例えば真央のトリブルアクセル
晚白袖を水滴つたう そのように涙こぼせり元横綱は
茅ヶ崎の浜ほの白く風ぐ頃に彫り深くあり富士の夕景
目に見えぬ時の巡りに人間は名をつけて呼ぶ子、丑、寅と
恋という我が人生の取りこぼしマリア・カラスの歌声に聴く
寛園寺の十二神将姿よし眼光鋭きイケメンぞろい

前中 映

掬つてはこぼす砂糖がきらきらと安息角を保つゆふぐれ
川の上に築かれてゐる駅があり春はほのかに泥がにほふも
今宵死ぬ浅瀬のための塩水を春の厨にととのへてゐる
老夫婦しばし待たせて柴犬が人には見えぬものを見てをり

磯部 剛*

寝しずまる小屋を抜け出し水底の小石のごとく月を見上げぬ
立金花たてうご、信濃金梅しんのう、金光花きんこうきらびやかに尾瀬の花たち

橋本 照美

ワイパーをとめてフロントガラス打つ雨を見つめぬ友逝きし日は
新年の挨拶小声で交はしあふ元旦零時の病棟巡視